

報 告：「現代農民家族とジェンダー～農民家族論再考～」

千葉 悅子（福島大学）

今回は福島大学助教授の千葉悦子氏に表記のテーマで報告していただいた。千葉氏は、「自分の生き方を自由に選択し、自分の人生を自分で設計する」自立した女性が農山漁村にどの位いるかが問題だとして、それを女性個人を想定して考えるのではなく、家族経営の中で考えることを重視する。そして、社会教育的視点に立って、どうしたら女性は自立していくのかという主体形成の面から考えるという問題設定を示した。

氏は、自立の中味について農民の場合は土地所有を基盤としながら能力を発展させていくという基礎があるとした上で、戦後自作農と農民家族の変容を整理し、土地所有を基盤としながら家族員を従属させていったと同時に、労働を通じて家族内の密接な関係をつくっていく条件があった点に注目する。そして1985年以降の家族経営の空洞化（危機）のなかで、農家の女性として自立して行く可能性はあるのかが問われていると指摘する。すなわち、生産労働を通して自立の契機、条件はどこにあるのか、重点は生産労働における家族内の連帶関係をどう変えようとしてきたかにあるとした。

農民的自立化論に立つ千葉氏は、管理労働に家族員がどう関わっていくかがポイントであり、そのことが生産労働を通じての自立の可能性があるか否かと極めて大きく関わっていると指摘する。農民経営のもとでの管理労働には、家族員内部での基本的矛盾対立（資本家－賃労働者のような敵対関係）はなく、管理労働の条件が整っていけば、役割分業を是正していくことができ、女性の農民としての自立の可能性が現れると主張する。ここでは、北海道の3つの地区の詳細な事例を紹介し、女性が労働管理から経

営管理の担い手へと自立化していく可能性を示して、地域的・集団的あり様が、個別経営を補完して女性の主体形成を促している点を重視した。そして、農家婦人の農民的自立化の過程を5つの発展段階に整理して、第5段階を「地域農業と地域生活を調和的に再編管理する担い手へ」と説明し、北海道別海町の「マイベース酪農」にその萌芽を見い出せるとした。さらに、茨城県里美村の事例を紹介し、家族変容と女性の地域との関わりも検討を加えた。

最後に、農業・農村の独自性は変質しつつあるものの、依然として農業労働を媒介にした家族、地域のつながりがベースにあり、労働を通じての自立の過程は、労働と生活が相互浸透していくという点（農民的自立）が大事であると指摘した。そして、家事労働を、農民家族では抑圧の基礎と捉えるべきではなく、両性が支え合い・相互に浸透し合うものとして積極的な捉え方をすべきであり、自給労働・家事労働の持っている農民的性格を描き出すこと、さらには主婦化の方向についての検討が、重要な課題であると結んだ。

討論では、自立をどういう側面から捉えるかをめぐって、所有主体の問題・生活面での自立との関わりの問題を中心に意見が出され、さらに主婦化について、家事労働の評価も含めた自立の過程における位置付けを中心に検討がなされ、多岐にわたる議論が展開された。詳細については、残念ながら割愛させていただく。

（東北福祉大学 星山 幸男）